



2025年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が設置されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

学会賞：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

奨励賞：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

功労賞：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

『日本語教育』論文賞：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

学会活動貢献賞：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。今年度は、学会の役員・代議員・評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員に贈られます。

各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2025年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

2025年度 日本語教育学会 学会賞

受賞者 みわ せい
三輪 聖 氏

【授賞理由】

三輪氏は、ハレ・ヴィッテンベルク大学日本学科、ベルリン自由大学言語センター、ボーフム大学 LSI 外国語研究所、ハンブルク大学日本学科等を経て、現在はテュービンゲン大学人文学部アジア地域文化研究所日本学科の専任講師として、教育、研究活動に携わっています。

三輪氏の日本語教育学への貢献において特筆すべき点として、1) ドイツを中心とした欧州の継承日本語教育の推進および情報発信、2) 欧州との日本語教育の連携促進の二点が挙げられ、氏はこれらを民主的シティズンシップ教育とかかわらせて多くの業績をあげ、また活発な発信をなされています。近年では、1) においては、複言語ファミリーをつなぐポータルサイト「つなぐ」の運営、同サイトにて公開されている『わたし語ポートフォリオ』の開発、「複数の文化・言語の中を生きる子どもたちにとっての「日本語」の意味—平和な社会づくりを目指した「継承日本語教育」(佐藤慎司・神吉宇一・奥野由紀子・三輪聖編著『ことばの教育と平和—争い・隔たり・不公平を乗り越えるための理論と実践—』(明石書店、2023年))、「自分のことばをつくっていく意味」(松田真希子・中井精一・坂本光代編『「日系」をめぐることばと文化—移動する人の創造性と多様性—』(くろしお出版、2022年))の執筆をされています。また2) においては、「ドイツの「政治教育」の教材—「政治」を「自分ごと」として捉えることから始める—」、「ドイツにおける政治教育の現場から見えてくること」(名嶋義直・神田靖子編『右翼ポピュリズムに抗する市民性教育』(明石書店、2020年))などを執筆されています。ドイツにおける移民・難民に関する課題に言語教育からアプローチし、それを民主的シティズンシップ教育へと繋げていく教育の発信は、日本語教育にも大きな示唆を与えてくれるものです。

さらに三輪氏は、所属機関での教育研究活動の他にも、ヨーロッパ日本語教師会役員(2011-2018年)、ドイツ語圏大学日本語教育研究会副会長(2020-2025年)、母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会の紀要編集委員長(2025年6月-)、言語文化教育研究会理事(2022年-)といった要職を務められ、国内外で日本語教育の社会的認知の向上に取り組まれてきました。近年では、共著『対話を通して学ぶ「社会」と「ことば」日本語×民主的シティズンシップ 深く、広く、じっくり考える20のトピック』(凡人社、2023年)を活用した研修会を実施するなど、民主的シティズンシップ教育の普及にも尽力されています。国内外で活躍されるこうした三輪氏の姿は、現在及び将来の日本語教育の重要な部分を指し示していると言えるでしょう。

これまでの学術研究、実践、社会的活動での顕著な業績を称え、今後のさらなる活躍に期待し、三輪氏に日本語教育学会学会賞を贈ります。

以上

2025年度 日本語教育学会 奨励賞

受賞者 うちやま ゆき
内山 夕輝 氏

【授賞理由】

内山夕輝氏は、2011年に浜松市外国人学習支援センター（U-ToC）に着任されて以来、一貫して地域日本語教育のシステム構築および体制整備に尽力してこられました。2012年度より文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業を活用し、2020年度からは総括コーディネーターとして、浜松市全域における地域日本語教育の基盤を確立されています。同氏の活動の特筆すべき点は、現場での実践を単なる経験則に留めず、常に学際的な知見と照らし合わせ、理論を社会実装へと導く極めて高い専門性にあります。

同氏は、東京外国語大学大学院修士課程において日系ブラジル人の学習動機を研究され、その修士論文「日本に在住するブラジル人の日本語学習動機－母語での生活が可能な環境において－」は学術的価値が極めて高いとして同大学の「推薦公開修士論文」に選出・収録されました。この研究で培われた学習者の置かれた環境と内面に対する深い洞察は、現在の活動の強固な基盤となっています。また、日本語教育学会監修『現代日本語教育ハンドブック』（大修館書店、2025）での執筆を通じ、地域の実践知を学术界へ還元することにも寄与されました。

その活動の白眉といえるのが、2024年4月より開始された、自立した言語利用者を対象とする「B1クラス」の運用です。このコースデザインにおいて、同氏は本学会が受託プロジェクトの2022-2023年度に受託した「日本語教育の参照枠」を活用した教育モデル開発事業：生活分野」の成果である「生活 Can-do ユニット」を活用し、『日本語教育の参照枠』の理念を地域教育の現場へと落とし込むことに成功されました。これは国の施策を自治体レベルで具現化した先駆的モデルであり、全国の地域日本語教育関係者に多大な示唆を与えるものです。

さらに、公益財団法人浜松国際交流協会の主幹として、当事者のナラティブを重視した活動を展開し、JICA 海外移住「エッセイ・評論」優秀賞を受賞されるなど、多文化共生への深い理解を広く発信してこられました。また、地域日本語教育の在り方について様々なシンポジウム等に登壇し、現場のリアルを伝えるとともに、その重要性と未来を発信し続けています。2025年11月には「浜松市地域日本語教育シンポジウム2025」を自ら企画・運営し、官民学を繋ぐ触媒としての役割を完遂されました。

以上のように、内山氏は直接的支援、カリキュラム開発、行政連携、学会活動を通じた知見の共有という多方面で、地域日本語教育の発展に多大な影響を及ぼしています。理論と実践を往還し、次世代の地域日本語教育を牽引する同氏の功績を評価し、今後の更なる活躍を期待して、内山氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2025年度 日本語教育学会 奨励賞

受賞者 か つき ゆうすけ
香月 裕介 氏

【授賞理由】

香月裕介氏は、大阪大学大学院言語文化研究科にて博士（日本語・日本文化）の学位を取得され、現在は神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部准教授として、教育、研究活動に取り組んでいらっしゃいます。

香月氏は日本語教育学に関する学術研究活動において、顕著な業績を残されています。特に、近年の書籍や研究論文としては、単著『日本語教師の省察的実践－語りの現象学的分析とその記述を読む経験－』（春風社、2022年、単著）、共著『留学生のためのディスカッショントレーニング－日本語で考える・話す・結論を出す：基礎から合意形成まで－』（凡人社、2024年、共著）、共著『ケースから学ぶ 知っておきたい 日本語教師の心がまえ』（アルク、2024年、共著）、共著「『日本語教育』における質的研究的側面の分析－日本語教育学の体系化に向けて－」（『日本語教育』第191号、2025年、共著）等が挙げられます。また、個人や共同研究プロジェクトにも積極的に取り組んでおり、研究代表者として「日本語教育学における質的研究プラットフォーム構築のための基礎研究」（研究代表者、2022年度-2025年度、科学研究費基盤研究（C））をはじめ、日本語教育に関する学術研究活動に精力的に取り組んでおられます。特に、タイ国での日本語教育経験をもとに、海外の日本語教育現場における現地教師と日本人教師の協働に関する質的研究法を用いた研究や、質的研究法を日本語教育学に位置付けるための研究に取り組まれています。また、ケース学習で日本語教員の心構えを学ぶ書籍の出版等、日本語教員養成においても熱心な取り組みが見られ、今後のさらなる活躍が期待されます。

香月氏は、日本国内外の学会等で数多くの発表を精力的に行っています。例えば、「教育研究における質的研究の活用」（公益社団法人日本天文学会 2022年春季年会 天文教育フォーラム、2022年）、「多読授業のダイアリーを読んだ2人の日本語教師の対話－経験の触発に着目した分析－」（韓国日本語教育学会 2023年度第43回国際学術大会、2023年）、「私たちが質的研究に出会った経験：触れて、振り返って、語り合う」（言語文化教育研究会第11回年次大会、2025年）が挙げられます。

また、社会活動としては、2014年4月より2024年3月の間、一般財団法人京都国際文化協会「基礎から学ぶ実践日本語教育講座」で講師を務め、また言語文化教育研究会の理事（2024年6月-現在）及び事務局長（2025年6月-現在）といった要職を担っておられます。

これまでの学術研究、教育実践、社会的活動における実績を称えとともに、大きな変革期にある日本語教育界において、さらなる活動が展開されることを期待し、香月氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2025年度 日本語教育学会 奨励賞

受賞者 よしかわ とおる
吉川 達 氏

【授賞理由】

吉川達氏は、2020年に筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程後期を修了され、現在まで精力的に研究・教育・社会貢献に取り組まれています。特に、近年は、日本語学習者の日本語読解能力に関する研究や授業づくりの分野で、大きな功績をあげています。

研究活動としては、「日本語教育における多読の環境整備と実践，効果測定についての研究」（2018-2022年度，科学研究費助成事業基盤研究（B））をはじめとする研究課題に研究代表者として取り組まれています。また，単著「日本語教育における多読－読むことによって読む力を育てる－」（『日本語学』秋号，2023年）や共著「回帰直線を用いた2つのリーディングスパンテスト間の得点の等化」（『佐賀大学全学教育機構紀要』9号，2021年）等の数多くの論文を執筆され，単著『日本語教師におくる多読授業実践のススメ』（国書刊行会，2024年）や共著『「読む」からはじめる日本語会話ワークブック』（アルク，2024年）等も出版されています。様々な学会・研究会等で招待講演等をされている実績からも，吉川氏の研究活動が多方面で支持され，熱い期待が寄せられている研修者の一人であることが窺い知れます。

教育活動としては，立命館大学情報理工学部准教授として教鞭を取られ，留学生への日本語教育などに尽力されています。特に，多読を中心にメタバースを利用した授業実践など先駆的な授業活動に取り組まれています。またそれを学会，研究会等での発表を通して積極的に発信することで，多読の側面から日本語教育実践の一層の活性化に貢献しています。

吉川氏は，学外における社会貢献活動にも積極的に取り組まれています。文部科学省委託「現職日本語教師研修プログラム普及事業日本語教師【中堅】に対する研修」（2025年度，公益社団法人日本語教育学会受託）におけるアドバイザーのほか，数々の研修に携わり，日本語教育人材の育成に大きな貢献をされています。

研究活動，教育実践活動，社会的活動の多方面にわたる様々な活動と実績を称えるとともに，大きく変貌を遂げようとしている日本語教育界において，言語教育と情報理工学を往還する独自の視点でさらなる教育研究活動が展開されることを期待し，日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2025年度 日本語教育学会 功労賞

受賞者 はたさ ゆきこ
畑佐 由紀子 氏

【授賞理由】

畑佐由紀子氏は、1983年より日本語教育に携わり、イリノイ大学、パデュー大学、アイオワ大学、モナシユ大学等で日本語教育に関わる学術研究、日本語教育実践、教員養成に取り組まれてきました。広島大学に活躍の場を移された後も、多くの研究業績を残しつつ、教員養成、後進の研究者の育成に尽力されました。

畑佐氏の日本語教育に関わる功績は多岐にわたります。日本語教育実践においては、カリキュラム開発や教材開発に取り組まれ、共著「なかま」シリーズ (Heinle & Heinle Publisher) は、「コミュニケーション能力の育成に重点を置く」、「文化的な文脈や実際の場面を意識する」等の特徴を持ち、第二言語習得研究の成果を活かした教材として、1998年の出版以来、主に北米で幅広く活用されています。

研究活動においては、文法、語彙、音声、談話と多岐にわたって精力的に研究をされています。長年にわたる実践と研究の成果は単著『第二言語習得研究への招待』（くろしお出版、2003年）、単著『外国語としての日本語教育 多角的視野に基づく試み』（くろしお出版、2008年）、共編著『第二言語習得研究と言語教育』（くろしお出版、2012年）、単著『日本語の習得を支援するカリキュラムの考え方』（くろしお出版、2018年）、『学習者を支援する日本語指導法Ⅰ・Ⅱ』（くろしお出版、2022・2023年）など、多数の編著書として刊行されています。これらの中に著された学習過程や言語習得上の問題点、日本語教育プログラムを構築・運営・改善するために必要とされる理論や概念等は、日本語教育実践の発展や教員養成に大きく寄与するものであると言えます。さらに、『第二言語としての日本語の習得研究』（第二言語習得研究会）、『日本語学』（明治書院）などの他、*Modern Language Journal* (Wiley)、*Japanese Language and Literature* (University Library System, University of Pittsburgh)、*Language Assessment Quarterly* (Routledge Journals, Taylor and Francis Ltd.) などにも論文を発表されており、研究面での業績はきわめて顕著です。

この他、全米日本語教育学会理事、大学日本語教員養成課程研究協議会の理事などを歴任され、日本語教育の発展に尽力されてきました。

以上のように、畑佐氏は国内外で日本語教育に関する実践や学術研究の実績がきわめて顕著であるだけでなく、多くの日本語教師・日本語教育研究者の教育・指導・育成に携わってこられ、日本語教育の発展に多大な貢献をされました。

その功績を称え、ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

2025年度『日本語教育』論文賞受賞論文

日本語能力と心理検査から探るグレーゾーンの外国につながる子どもの能力と支援方法

—DLA・KABC-II・P-F スタディに基づく事例研究—

掲載号：『日本語教育』190号（2025年4月発行），pp. 122-137

執筆者：橋本^{はしもと} ゆかり 氏（横浜国立大学）・鈴木^{すずき} 朋子^{ともこ} 氏（同）

【授賞理由】

本論文は、学校現場において日本語能力の不足なのか、学力の問題なのか、あるいは発達特性によるものなのか判定がつきにくいグレーゾーンの児童であると報告された外国につながる子どもが抱える問題を究明し、具体的な支援方法を提案している。認知機能、日本語能力、学力を関連づけて捉える分析の枠組みは、子どもの実態への理解を深める有効な観点を提示しており、表層で見えている子どもの問題は複合的な視点から評価を行っていく必要があることを示唆している。本研究は、公正な評価がされず不利益を被る児童をなくすという重要な課題と徹底的に向き合った意義深い研究であると高く評価する。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

日本語能力検査、知能検査、性格検査の3つの異なる視点から調査を行い、統合的に読み解いていくプロセスを緻密に記述していくことで、グレーゾーンの児童の支援に必要な視点を明らかにした支援策を明確に示しており、学校における日本語教育現場のみならず、教科教育あるいは入学前のプレスクール実施に対しても示唆に富むものである。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

本論文は、外国につながる子どもの教科学習における躓きが日本語能力の問題なのか学力の問題なのかを適切に判定するという、学校教育現場における非常に重要で困難な課題について、日本語能力検査、心理検査を用いた複合的な検査・分析を行っている点が斬新である。日本語教育や心理学といった複数の専門的知見を擦り合わせて児童の能力を測定しており、日本語教育にとどまらない新たな領域にチャレンジした論文だと言える。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

児童とその保護者に限らず、養護教諭、特別支援コーディネーター、在籍級担任教員、国際教室担当教員など多くの関係者の協力を得た調査であることから、本論文の提案は専門領域を超えて教育現場に関わる人々に訴えるものとなっている。また、複数の検査を組み合わせた複合的なアプローチに基づいた分析結果も、様々な専門領域にまたがる示唆を含んでいる点で高く評価できる。

以上

受賞論文 要旨

日本語能力と心理検査から探るグレーゾーンの外国につながる子どもの能力と支援方法 —DLA・KABC-II・P-F スタディに基づく事例研究—

外国につながる子どもの教科学習における躓きが日本語能力の問題なのか学力の問題なのかといった判定は難しく、グレーゾーンの子どもの数が増えている。本研究は、先行研究で指摘された検査上の複数の問題に配慮し、学校における観察と、検査データ、日本語教育・心理学の専門的知見を擦り合わせることで、グレーゾーンの児童の能力と支援の方向性を明らかにした。具体的には、中国語を母語とする小学校3年女子(9歳)1名を対象に、日本語能力検査のDLA、多文化の子どもにとっての公平性を目指して開発されたKABC-II、性格検査のP-Fスタディを行った。事前に養護教諭・特別支援コーディネーター、在籍級担任教員、国際教室担当教員等より聴取を得た。結果、協力児のレベルと潜在能力を明らかにし、認知尺度と習得尺度から支援の在り方を示した。性格検査からは母文化が学習環境の整備を阻害している可能性も推察された。

【キーワード】 外国につながる子ども、日本語能力検査 (DLA)、心理検査 (KABC-II・P-F スタディ)、グレーゾーン

Competence and the Support Methods of the Child with Foreign Connection in Gray Zone Explored from the Japanese Language Ability and Psychological Tests: Case study based on DLA, KABC-II, and P-F studies

HASHIMOTO Yukari and SUZUKI Tomoko

It is difficult to determine whether the stumbling blocks in the academic learning of children with foreign connections pose problems pertaining to their Japanese language or academic ability, and the number of children in this gray zone is increasing. This study clarifies the abilities of children in the gray zone and the appropriate support for them by combining observations at school, test data, and specialized knowledge in Japanese language education and psychology, taking into consideration the multiple problems identified in previous studies. Specifically, a 9-year-old girl in the third grade of elementary school, whose native language is Chinese, was given the DLA, a Japanese Language Proficiency Test; the KABC-II, developed to be unbiased for children of diverse cultures; and the P-F Study, a personality test. Advance interviews were conducted with the school nurse who also serves as the special support coordinator, the teacher in charge of her class, and the teacher in charge of the international classroom. The results revealed the level and potential of the subject a 9-year-old girl in the third grade of elementary school whose native language is Chinese child and indicated how to provide support based on the cognitive and learning scales. Based on the personality test, it was surmised that a child's cultural background may complicate the task of providing a suitable learning environment.

【Keywords】 Children with foreign connections, Japanese Language Proficiency Test (DLA), Psychological test (KABC-II and P-F Study), gray zone

(HASHIMOTO, SUZUKI: Yokohama National University)

2025年度 日本語教育学会 学会活動貢献賞

受賞者一覧 (50音順)

【授賞対象】

2025年度は、学会の役員・代議員・評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員の皆さまに、学会活動貢献賞を贈ります。

いわた なつほ
岩田 夏穂 氏

おかもと のりこ
岡本 能里子 氏

くろさき まこと
黒崎 誠 氏

こやなぎ かおる
小柳 かおる 氏

こんどう あや
近藤 彩 氏

とだ さわ
戸田 佐和 氏

なかがわ こ
中川 かず子 氏

につう のぶこ
二通 信子 氏

はしもと なおゆき
橋本 直幸 氏

やべ ひろこ
谷部 弘子 氏

よこやま のりこ
横山 紀子 氏

よしなが みおこ
義永 美央子 氏

わたなべ ともこ
渡部 倫子 氏

以上